

連載 第36回 福聚山史

池浦 泰憲 文
及川 一晋 編

戦後復興から現代へ

6、サンノゼ妙覚寺別院建立の念願

昨年十月三十一日、米国カリフォルニア州サンノゼ日蓮仏教会妙覚寺別院の創立30周年記念法要が営まれた。三十年前、日蓮宗にとつて全くの無縁の土地だったこの地での別院建立には、当時の常円寺三十七世及川真学上人の尽力があり、常円寺檀信徒の力が大きく関わっていた。

昭和四十五年（一九七〇）十一月、京都本山妙覚寺加藤龍法眞首の遷化をうけ、真学上人が後任の眞首として晋山することとなった。当時、妙覚寺の参与として眞首を支えていた真学上人が、新たに眞首として晋山するにあたっては紆余曲折があったが、常円寺の住職との兼務という形で、本山七十七世の眞首としてその法燈を継承することとなった。

当時本山は、堂宇の修繕をはじめ多くの課題を抱えていた。それらを克服し、いわば本山を再興していくことが真学上人に課せられた使命であったが、それらを周囲の多くの力を得て、一つ一つ解決していった。そんな或る日、上人は本山の宝蔵で尊像と出会う。…或る日、わたしは宝物土蔵に入りました。滅多に入ったこともない蔵の中を片付けながら何気なしに大きな桐箱を開けてみると驚くほど立派な一塔両尊の大きな宝座尊像が現れました。また別の箱からは真黒い等身大の聖人の坐像が現れました。今まで

恐らく何十年となくこの暗い土蔵の中で誰かからの給仕を受けることもなく黙って座つていらつしやうたかと思つと申し訳なくお詫び申し上げる言葉もありません。…

（本山妙覚寺）「たちはな」誌 昭和六十年四月）この一塔両尊と日蓮聖人の尊像は、江戸時代妙覚寺が北陸中国等へ出開帳の時、地方出座にお祀りした諸仏、祖像であると真学上人は聞かされる。出開帳とは、その尊像の存在する寺院以外の場所に出張して、開帳を行うことであるが、その出開帳に各地へお出まされた、宝塔、釈迦如来像、多宝如来像と日蓮聖人像であったのである。この尊像を発見し、真学上人は次のような思いに至る。

…こうした一連の仏像の導きによって、わたしは予てから祖師が念願とされた四海帰妙広宣流布の一分をわたしなりに果たすことがわたしの務めであると思ひ当たりました。

わたしは既に老翁であります、わたしの気持ちを感じて海外に妙法を弘通してくれる人があれば、出来得る限りこれを応援することがわたしの残生の仕事ではあるまいかと気づいたのであります。

数年前からわたしは、日蓮宗海外布教後援会を起して多少のお手伝いをしてきましたが、もっともつと力をこめて広宣流布をしなければいけないのではないかと、それを実行させるために、この出開帳の仏様たちが庫の中から姿を現して下さったのではないかと気づいたのであります。

五百五十遠忌に山本さんが作られたこの仏様たちに、七百遠忌にアメリカへご出座願つて白い人、黒い人たちに妙法を説いていただければ仏様は勿論のこと、仏像建立の施主山本さんもどれほど喜んで下さるのではあるまいかと思つたのであります。（同前書）この尊像は、その銘から山本藤兵衛、同富貴という夫妻が宗祖五百五十遠忌（天保二年、一八三一年）の際に、令法久住のためと祈願を込め造られたものであった。真学上人は、広宣流布のため各地を遍歴したという由緒をもつこれらの尊像に、今度は宗祖の七百遠忌（昭和五十六年＝一九八一年）にあたり、アメリカという異国の地に出座を願つて妙法広宣に力を賜りたいと考えたのである。

こうした決意に至つた後、上人はとにかくこ



妙覚寺尊像を安置するサンノゼ妙覚寺別院
平成22年10月30日「30周年記念法要」より

の尊像を本尊とする妙覚寺の別院建立に奔走する。とにかく何はともあれアメリカに建立の地を求めることが必要であるが、当初はサンフランシスコで探すものの断念し、その後、中央大学教授の佐藤智雄教授のアドバイスを受け、カリフォルニア州サンノゼの地が提案され、当地での調査が本格的に始まった。その調査には当時シアトル教会主任であった松田龍龍上人があつた。上人は、実際現地の風土を肌で感じながらがよいという真学上人の意向を受け、シアトルの教会を辞任して一家でサンノゼに移り住み、候補地を探ることとなった。その結果、市街の中心に土地を見つけ、アメリカの複雑な手続きを経、ついに昭和五十四年（一九七九）八月購入し登記を完了するのである。

そして、昭和五十五年（一九八〇）十一月二十三日、アメリカカリフォルニア州サンノゼ市に、境内二千坪、本堂百六十坪、庫裡七十坪、開教館五十坪という妙覚寺別院が完成する。

ところで、すでに触れたように、この別院建立は日蓮聖人の七百遠忌事業であつたが、それは妙覚寺とともに常円寺の御遠忌事業でもあつた。昭和五十三年頃より、真学上人は常円寺の檀信徒に四海帰妙の旗を異国に進めるといふ念願を披露し、その協力を求めた。建立にあつては、常円寺で勉強した青年僧六十名ほどが成子会を結集して物心両面の応援があり、また、常円寺の檀信徒も、遠い異国の地の別院であるためにもかかわらず、自分の菩提寺のことを第二して協力して成し遂げられたのであつた。

平成二十三年、別院建立から三十年を経て、奇しくも常円寺三十九世及川周介上人が、妙覚寺眞首として晋山し、真学上人と同じ道を進むこととなったが、妙法の広宣流布という大きな折願を果たすには、別院の建立同様、一寺の力だけではなく今後とも一致して多くの力を結集していく必要があるのである。（つづく）